

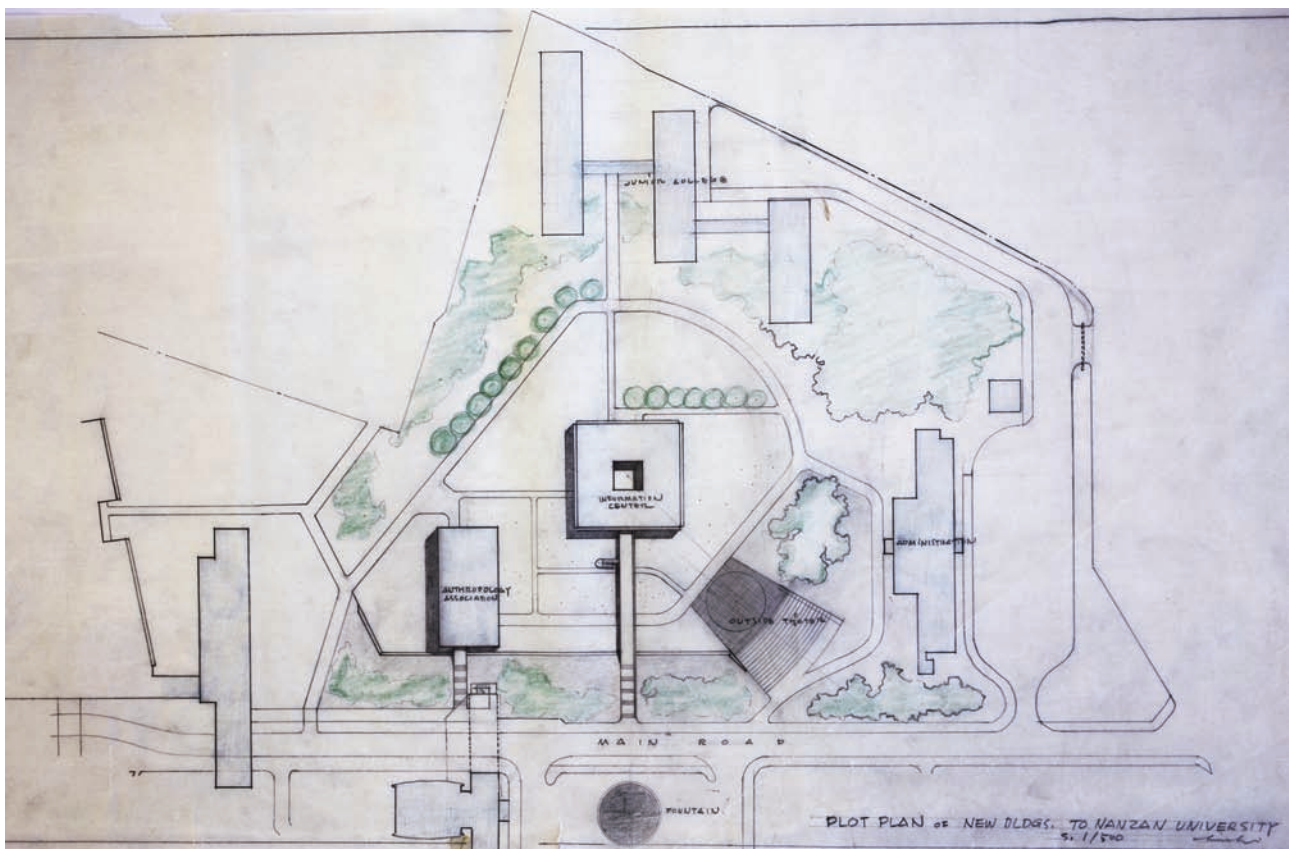
南山アーカイブズニュース

Nanzan Archives News

第6号 2013年11月1日

目次

学術資料の保管と利用、そしてもう一つのこと	森山 幹弘	2
日本古代史に関する史資料の保存と利用の現状	中尾 浩康	4
史料で学ぶ近現代史をめざして	高橋 民子	8
ヒルシュマイヤー著作集編纂事業と学園史料	岡部 桂史	10
記念誌・史料集などの紹介 3		11
《史資料解説》“PILOT PLAN OF NEWBLDGS. TO NANZAN UNIVERSITY” (レーモンド設計事務所所蔵) について	永井 英治	12



PILOT PLAN OF NEW BLDGS. TO NANZAN UNIVERSITY (レーモンド設計事務所蔵)

学術資料の保管と利用、そしてもう一つのこと

森山 幹弘

南山大学図書館には貴重な学術資料が収蔵されている。「貴重」という意味は様々に定義できるが、図書館では貴重書を一般書とは区別して所蔵し、その利用についても他の資料とは別の規程を定めて利用して頂いている。この一文の目的は、本学の図書館や学園史料室のものだけに限らず、貴重な学術資料をどのように保管し、どのように利用してもらおうかを考えてみようとするところにある。

貴重書に限らず所蔵されている資料がまったく利用されなければ、その資料としての利用価値は低いと言わざるを得ないが、適切な利用がされなければ貴重な資料が損傷してしまい、その価値が損なわれることになる。経年劣化を最小限に食い止めることは最新技術をもってすればかなりのレベルで可能であるが、それ以上に魅力的なのは近年特に発展が目覚ましい資料のデジタル化である。資料を一旦デジタル化してしまえば、経年劣化はそれ以上起らない。また、その資料は手軽に利用に供できるとともに、利用によるオリジナルの資料は損傷を免れる。しかし、仮にすべての資料をデジタル化できたとして、それで資料

がそれまで以上に目覚ましく活用されるようになるだろうか。

たまたまこの一文を書いている私は、20年ほど前に学位を取得するために滞在していたオランダのライデン大学にきている。私が必要とする資料は、ライデン大学の図書館にも所蔵されているが、運河を挟んで向かい側にある王立言語地理民族学研究所(Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde 英語名は Royal Netherlands Institute of Southeast Asian and Caribbean Studies)に所蔵されており、こちらを利用することが多い。この研究所はオランダが東インド(現在のインドネシア共和国にほぼ重なる地域)と西インド(南アメリカの北東部に位置するスリナム、アンティル諸島等のカリブ海地域)を植民地としていた1851年に設立された。とりわけ、東インドと独立後のインドネシアに関する資料を中心に収集を行うとともに、研究書と学術雑誌の刊行を150年間にわたって行ってきた。現在は50万冊(30万タイトル)の図書、20万点の写真、5千点の版画と絵画、2千点の地図と地図帳、500メートルの写本とアーカイブを所蔵している。

インドネシア研究においては世界で最も優れたコレクションを有しているこの研究所の図書室は、写真1のように簡素な作りで広さも決して広くはない。その図書室は3階建ての研究所の1階に設置されており、席数も高々50席くらいである。図書室にはマイクロフィルム・リーダーが2台、マイクロフィッシュ・リーダーが3台置かれている他、図書検索用のコンピュータ端末が10台、インターネット接続用のコンピュータが3台、そしてオーディオ資料の再生機器が1台という極めてシンプルな図書室である。しかしながら、年



写真1 王立言語地理民族学研究所の図書室

間を通して、全世界のインドネシア研究者がここに文献調査、研究、執筆にやってくる。ここに来るとタイミングが合いさえすれば、世界中のインドネシア研究者と会うことができる。会えば、図書室の外でコーヒーを飲みながら、それぞれの近況や、現在の研究テーマについて話が弾み、様々な情報交換もできる。時には共同研究の話に発展したり、シンポジウムやセミナーに招待される話に繋がることもある。

この一文に添える古地図(写真2)は、図書室の上の3階に写真、地図、アーカイブズなどの特別資料を別置している資料室に収蔵されているものの一つで、許可を得てここに掲載させて頂いている。この研究所のアーカイブズの特徴は東インドに何代にもわたって住んでいたオランダ人の家族などの個人のものが多いことである。一方、植民地時代の公文書はハーグの公文書館に集約して保管されている。

この研究所に収蔵されている貴重な資料も近年徐々にデジタル化が進められており、いずれはかなりのもの

がこの図書室に来ることなく、自宅のコンピュータで読めるようになるであろう。すでにデジタル化された資料についてはどこからでも無条件に無料でダウンロードでき、広く公開の方向に舵が取られている。しかし、果たしてすべてのものがデジタル化されたとして、これまでこの研究所の図書室に通って来っていたインドネシア研究者たちがここへ来ることをやめるだろうか。私にはそうは思えない。場所の魅力と人の魅力、そして即座

にレファレンスできる資料に囲まれて研究することができる環境はデジタル化されてもそれによって代替されるものではない。

デジタル化が進むことによって資料の活用は促進され、現物は安全に保管される。しかしながら、その上でさらに必要なのは、上述のオランダの研究所の例で述べたような研究者を引きつける雰囲気と環境である。それを創出するのは容易いことではないかもしれないが、南山大学の図書館も南山大学史料室も、そのような場所と雰囲気を創り上げていくことも必要ではなかろうか。

付記 上述の世界のインドネシア研究者にとって比類のない図書室を付属する王立言語地理民族学研究所が2013年の夏、オランダ政府による研究機関の再編の対象となり、その先行きが不透明になっている。世界的な遺産ともいえるこの研究所の学術資料が今後も然るべく保管されることを願ってやまない。

(南山大学図書館長)



写真2 'Nieuwe Pascaert van Oost Indien, 1680' 「東インド新地図 1680年」
王立言語地理民族学研究所(KITLV: Royal Netherlands Institute of Southeast Asian and Caribbean Studies) 所蔵

日本古代史に関する史資料の保存と利用の現状

中尾 浩康

はじめに

今回、南山学園史料室より日本古代史に関する史資料の保存と利用の現状、また南山学園史料室への提言等について寄稿を求められた。私の専門は歴史学（日本古代史～中世史）で、古代の軍制構造から武家政権成立に至る道のりの解明を主たる研究テーマとしている。また仕事柄、近年は歴史教育（社会科教育）について執筆機会を頂くことも多いが、学問分野としての「アーカイブズ」については全くの門外漢である。

よって、学園史料室に提言できるほどの専門性は備えておらず、的外れな文章とならないか危惧するが、上記課題に関する拙い雑感をまとめその責めを塞ぐこととしたい。

1 日本古代史に関する史資料と研究 —文献史学を中心に—

日本古代史を研究する際、文献史学では文献史料と出土文字資料が基本資料となる。前者には、①官撰史料（律令格式や六国史等）・古記録（貴族の日記等）・儀式書・物語・説話・軍記物・各地の寺社等に伝わった古文書群等、後者には、②木簡・漆紙文書・墨書土器・金石文・瓦・木製品等がある。

これらはいずれも当時の貴重なアーカイブズ（記録史料）とも言えるが、①の多くは『新訂増補 国史大系』『大日本史料』『大日本古記録』『増補 史料大成』『史料纂集』『大日本古文書』『平安遺文』等の叢書・全集に収録されており、編纂物として刊行されている。更に『日本古典文学大系』『新日本古典文学大系』『日本

思想大系』『訳注日本史料』等、より精度の高いテキストもある。また現在では、全注釈・全現代語訳のなされた一般向け書籍も増えつつある。②については、平素から発掘調査機関が発行する発掘調査報告書等を目配りする必要がある。なお木簡については、木簡学会発行の『木簡研究』が木簡研究者による正確な釈読と、発掘担当者による木簡出土状況等の記録がまとめられていて有益である。

近世史の研究等では、武家文書・寺社文書・村方文書・町方文書・村絵図等の古文書に触れることが多く、くずし字の読解力が必須となる。しかし、古代史研究ではおおよその史料は既に刊行されているため、史料入手は比較的容易で、普段の研究でもくずし字の読解力を要する場面は少ない。

しかし、「それ故」の難しさも存在する。例えば近世史等では、地域に残る文書等の調査から新出史料を紹介・研究することで実績を重ね易く、新たな研究テーマ開拓の可能性も広い。それに対し、古代史の諸史料は早くから刊行物として流通してきたため、研究テーマ的にも既に出尽くした感があり、先行研究も膨大な蓄積がある。また、古代史の史料はその多くが国家や貴族等がまとめたものであるため、他の時代に比して一般民衆や地方社会の実相を抽出し難い（考古資料はそれを補う意味でも貴重である）。故に、史料的に研究が難しいテーマも少なくない。

加えて①の刊行物は、古代史研究者なら誰もが目を通すいわば“共通テキスト”となるため、より精緻な史料読解力や史料批判力が求められる。しかし、法制史料・古記録・儀式書・物語等ではそれぞれ読み方や理解するための訓練が異なる。また近年の研究動向から、今や中国語の知識も不可欠となりつつある。

1999年、中国浙江省寧波市の天一閣博物館で上海師範大学の戴建国氏により『天聖令』が発見された。整理・校訂・復原等を経て2006年に公刊されて以降、現在、古代史研究では日唐律令や法制度の比較研究が活況を呈している。

『天聖令』とは、北宋時代の法令集（1032年）である。大宝律令（701年）・養老律令（718年）が手本とした永徽令（651年）とほぼ同内容とみられる開元25年令（737年）を基本的に引き継ぎ、どう改変したかが記されている上、開元令のうち使われなかった部分（不行唐令）が史料として収録されていた。今回見つかったのは合計514条（宋令293条、唐令221条）だが、中国では唐律（刑法）は『唐律疏議』として伝存したものの、唐令（行政法・統治法）は早くに散逸したため、極めて貴重な発見と言える。一方、日本では律はわずかしか伝わらなかったが、養老令の平安時代の注釈書である『令義解』『令集解』は伝存している。『天聖令』の発見によって、日本は唐の法令や制度の何を継受し、何を継受しなかったのか、日本の独自性はどこか等、比較・分析が可能となったのである。

研究には、2006年に出版された『天一閣藏明鈔本天聖令校證 附 唐令復原研究』（天一閣博物館・中国社会科学院歴史研究所天聖令整理課題組校證、全2冊、中華書局、2006年）が現在における基本史料となる。但し、本格的に比較研究を行うためには、例えば隋唐時代なら『隋書』『旧唐書』『新唐書』『資治通鑑』『大唐六典』『通典』『唐律疏議』等をはじめ、膨大な中国典籍の読解力や中国語の語学力が求められることになる。

大学の史学科では、歴史好きで入学した学生が、地味で難解な史料読解の授業の連続に歴史嫌いになってしまったとの逸話は、昔からよく聞く話である。古代史研究においては、更に輪がかかっている状況と言えるかもしれない。

2 史資料の保存と利用の現状

②のなかでも、文献史学では特に木簡や漆紙文書が貴重な史料となる。それらからは、文献史料だけでは見えてこない地方行政の実相や人々の生活にまつわる

重要な情報を抽出できることが多い。

木簡は文字を墨書した木札で、表面を削ることで再利用が可能のため、荷札・手紙・立札等として活用された。全国各地で約37万点が出土しているが、水に浸かった状態や水分の多い粘土質の土により腐食を免れ伝存した。一字でも文字が書かれていれば木簡であり、出土物には削り屑も多いが、それらが年代の測定や遺跡の機能を探るのに役立つことも少なくない。

また漆紙文書は、漆が付着したことで地中でも腐食せず遺存した文書のことである。漆は古くから塗料や接着剤等として使用されたが、乾燥やほこり・ちりを極度に嫌う。そのため、漆を容器に入れ保管する際は、不要となった紙を漆に密着させて蓋にした。漆が染み込んだ部分は皮製品のように硬化し、破棄された後もその強靱な絶縁力から土中でも分解されない。当時紙は貴重であったため、反故となった文書や典籍等が蓋紙に用いられることが多く、それが当時の情報を今に伝える貴重な史料となっている。これらを含む②については、主に発掘調査機関等で収集（発掘）・整理・保存がなされている。

①についても、その原本や写本は各地の博物館・研究機関・図書館等に保管されており、なかには国宝や重要文化財の他、世界記憶遺産に指定されたものもある（2013年、国宝『御堂関白記』〔公益財団法人陽明文庫蔵〕がユネスコ〔国際連合教育科学文化機関〕の世界記憶遺産に登録されたことは記憶に新しい）。①の編纂物・刊行物は、一線の研究者が各地に残る諸写本を調査し、その異同等について校異や注を付し刊行されたものであるが、それらの原本・写本は貴重史料であり一般には非公開のものも少なくない。

しかし近年、古代史研究を行う上で利便性が大きく向上したことがある。1つ目は、各研究機関収蔵史資料のデータベース化が大きく進展したことである。その代表例が、東京大学史料編纂所と奈良文化財研究所のデータベース（以下DBと略）であろう。前者は各時代に渡る膨大な文献史料について、後者は出土文字資料や地方官衙・寺院等の考古遺跡に関するDBが充実している。特に古代史研究者がよく活用するのが、前者の古記録DB・古文書DB・奈良時代古文書DB・平安遺文DBや、大阪市立大学（正倉院文書データベ

ース作成委員会)の正倉院文書 DB 等であろう。出土文字資料については、後者の木簡 DB・木簡画像 DB・墨書土器画像 DB や、明治大学古代学研究所の墨書・刻書土器 DB が便利である。また中国史料については、台北の中央研究院が提供している中央研究院史語所漢籍電子文献 DB が有益である。その他にも、大学・博物館等の研究機関や研究者個人作成の DB は増えつつある。いずれもインターネットで各ホームページに接続し、DB でキーワードを入力・検索すれば、関連史料やデータが抽出される。更に画像ファイルがある史料については、画像を確認することや印刷することも可能である。

2つ目は、まだ高価なものが多いが、この15年程で文献史料の電子化が進んだことである。『平安遺文』や、中国史料では『文淵閣四庫全書・電子版』『中国歴代基本典籍庫・隋唐五代卷』等、市販の CD-ROM 版・電子版の他、インターネットでダウンロード可能な史料データもある。論文や報告レジュメの作成時、史料入力だけでも多くの時間を費やす作業だが、これら電子化された文字データによりその入力時間を大きく短縮することができるようになった。また、かつては書冊の索引を活用し諸史料を繰っていた作業が、DB 化の進展や電子版の登場により、その検索力は飛躍的に向上した。

3つ目は、上とも関連するが、貴重史料の一般公開がかつてに比べ大きく進展したことである。『正倉院古文書影印集成』『尊経閣善本影印集成』『宮内庁書陵部本影印集成』『天理図書館善本叢書』『東京大学史料編纂所影印叢書』『東京国立博物館古典籍叢刊』等、これまで閲覧が難しかった貴重史料が影印(写真)本として刊行されるようになった。これら影印本の刊行や画像データ等での公開が進んだことにより、①の刊行物の文字を自ら写真で確認・校合するという研究姿勢が、今や古代史研究者の多くに共有されつつある段階に入ったと言える。

3 写本調査の経験から

上述したように、①の刊行物は各地に伝わった原本や諸写本を調査し、同じ箇所でも文字が異なる場合は

その異同について校異や注が付されている。しかし、時には校異のミスや抜け落ちを見つけることもある。実際に私が経験した一例を紹介したい。

平安時代、桓武天皇は「軍事と造作」(蝦夷の征討と都の造営)を推し進めた天皇として教科書にも記述があるが、延暦8(789)年には大規模な蝦夷の征討(征夷)を実施している。その時の征夷軍の総兵力数について近年議論があり、重要な論拠の一つとなっているのが『続日本紀』延暦8年6月庚辰条の「軍士所_レ食、日二千斛」の箇所である。なお、『新訂増補 国史大系 続日本紀』『新日本古典文学大系 続日本紀』をはじめ、その他の注釈本・現代語訳本等、全ての刊行本を見ても当該箇所に校異は何も付されていない。

『続日本紀』には多くの写本が存在するが、金沢文庫本(名古屋市蓬左文庫蔵)系統とト部家相伝本(現存せず)系統の2つの柱がある。なお、前者は『新日本古典文学大系 続日本紀』の底本であり、後者はその系統では現存最古の兼右本(天理大学附属天理図書館蔵)を『新訂増補 国史大系 続日本紀』が底本としている。但し前者の金沢文庫本は、現在、影印本(『続日本紀 蓬左文庫本』5、八木書店、1993年)が出版されており、それを確認したところ当該箇所は「斛」ではなく「日二千斛」となっていることに気が付いた。

特に古代史研究では一つの文字が解釈や学説を左右することも少なくない。事実この箇所は、延暦8年の征夷軍の総兵力数を10万人と推定する説の重要な根拠となっている(他の箇所から糲〔乾飯〕を1日に2升食していることがうかがえ、「二千斛」を糲と見なして2升で割ると10万人の計算となる)。従来、延暦8年の征夷軍の総兵力数は、他の記事から「五万二千八百餘人」とされてきた。また、延暦11(792)年には軍団兵士制が停廃され健児制が採用されるが、延暦8年の段階で10万人もの動員が可能であったのなら、なぜ兵力確保面で充分機能していた軍団兵士制が停廃されるのか等、平安時代の軍事制度の展開過程から考えても新たな課題が生じることになるのである。

歴史学は厳密な史料批判がなされて、初めてその実証性が担保される。故に、一般にも閲覧可能なものに限るが、17の諸写本について宮内庁書陵部、東京大学史料編纂所、国立公文書館、天理大学附属天理図書館、

名古屋市蓬左文庫等を訪問し写本調査を行った。その結果、当該箇所について、金沢文庫本系統の諸写本全て（書陵部四十冊本、東京大学史料編纂所本、角倉本、桂宮本、九条家本、吉田家本）と、卜部家相伝本系統でも内閣文庫本（国立公文書館蔵）が「斛」ではなく「解」としていたこと、それについていずれの編纂本・刊行本も校異を落としていたことが明らかとなった（但し、「解」とする場合かえって解釈は困難となる。文意・語順等の分析から当該箇所は従来通り「斛」が妥当と結論づけた。また、諸史料の検討から、延暦8年の征夷軍の総兵力数については6万数千人程度と推定した。

インターネット時代の到来が各研究機関のシステム化・ネットワーク化を促進させ、閲覧やレファレンスサービス等でも利用の便が大きく進展したことは周知の通りである。自宅に居ながら容易に収蔵状況や利用規則（公開・非公開等）を確認できるようになったことは、特定の研究者に限られない施設利用や史資料活用の裾野を広げることになった。上のような調査を実施することができたのは、各研究機関における情報公開の進展と、検索・利用の向上があったからに他ならない。

おわりに 一学園史料室への期待一

文書館（史料室）の基本業務が、(1)収集・整理・保存、(2)利用・研究・普及であることは言うまでもない。文書館（史料室）が図書館や博物館と異なるのは、母体組織の組織内記録を継続的に受け入れ管理保存していくという、その機能にこそある。(1)に関して、博物館・図書館や学園内単位校との関係・連携等の他、膨大な記録・文書群の中から「何を残し、何を伝えるのか」等、いくつもの難問があることは承知している。ただ、木簡や漆紙文書の例からも想起できるように、微視的には不要・不都合と思われる史資料であっても、後の時代に生きる者にとっては「鑑」・「道標」にもなりうる貴重なアーカイブズ（記録史料）となる。巨視的な見地から貴重と判断される史料は、廃棄することなく是非とも後世に残し伝えて頂きたい。

(2)に関しては、自校史教育等、教育活動での史資料

活用を軌道に乗せつつある大学が多いと聞くが、「内」向きの活用・反応で完結しがちな傾向も指摘されつつある。その一方、史料室を「大学の“顔”」と位置付け、「外」への発信に力を入れている大学も存在する（例えば、京都大学文書館や明治大学史資料センター等）。よって、閲覧・レファレンスサービス・展示等の更なる整備拡充は勿論、「外」への情報公開・発信をはじめとする(2)の業務の一層の充実・発展を期待したい。上述したような調査・発見が可能となったのは、かつては閉ざされていたアーカイブズ（記録史料）が、情報公開化・デジタル化・刊行化等の進展により広く社会に公開され、一般の者でも利用・活用し易くなったことが大きい。

南山学園は東海地域における私学の雄であり、そのアーカイブズ（記録史料）は単なる「学園の記録」に留まらない。愛知県における宗教史・教育史・社会史・文化史・建築史等を研究している者にとっては、それらは極めて貴重な記録史料となる。「学園の記録」は同時に市民にとっての「地域の記録」であり、且つその史資料は「歴史の記憶」でもあるのである。「外」を意識したその姿勢こそが、引いては更なる学園への信頼・発展へと繋がっていくことは疑いがないであろう。

（南山高等・中学校男子部教諭）

史料で学ぶ近現代史をめざして

高橋 民子

史料の「史」は「文字」という意味だ。「先史時代」という表現があるように、「史＝文字がない時代は歴史ではない」という考えもある。だが、少しでも歴史を学んだ人ならば、歴史を語るのには文字だけではないことをご存知だろう。貝塚や土器は文字がない時代のようにずいぶん鮮やかに語ってくれる。ほかにも、街並み、建築物、地名などもすばらしい史料だ。

私は一時期、南山学園史料委員会の一員として、「史料（資料）の保存と利用」というテーマについて考える機会を与えていただいた。しかし、史料編纂の仕事について不勉強であることや、「必要なのは昨年度の資料、それ以前は倉庫の中」と日々の業務に終われる中で、委員として満足な仕事もできなかった。今回の執筆を機に、自らの日々の実践を振り返りつつ史料編纂の意義について改めて考えてみようと思う。まずは「アーカイブズ」を飛び出して、身近にあるたいへん魅力的な史料について述べたいと思う。

それは南山学園のライネルス記念館のことである。1932年に南山中学校が設立された時の本館である。委員会に出席した際に何度かこの建物に入ったが、外観の美しさ、内装の重厚さ、歴史を感じさせる空気はいつも変わらなかった。戦争末期、名古屋城周辺にあった陸軍の施設の一部が、南山中学校の本館を接收し、引っ越してきた。昭和区は比較的空襲が少なかったもので、軍が疎開してきたのだ。南山中学校は当時としてはめずらしい鉄筋コンクリート3階建ての建物であったので、軍に目をつけられたのであろう。

もう二十年近く前になるが、女子部の歴史好きな高校生が戦争中に南山の校舎が軍に接收されたことに興味をもち、学園の史料室を訪ねて調査活動をおこなった。新人だった私も彼女と一緒に史料室に何度か足を

運び、数々の史料が描く「戦争と学校」に衝撃を受けた。このことがきっかけとなって、私は授業でアジア太平洋戦争を扱う際に「南山と戦争」をテーマとして取り上げるようになった。『南山高等・中学校四十年史』や友の会発行の『南悠』などを参考に、現代の中学生に、戦争中の南山の学園生活を紹介する。軍が校舎を使用していたこと、中学生に勤労働員や軍事教練が強いられたこと、勤労働員中に亡くなった生徒もいたことなど、戦争の事実には生徒は心を動かされる。子どもたちも学業より戦争協力を優先しなければならない時代だったことを、自分たちと同じ中学生の身に降りかかったできごとなのだ実感してくれるようだ。

2013年夏、私は京都市伏見区での地域調査に参加する機会を得た。観光都市のイメージからは考えにくいですが、京都には戦前、陸軍第16師団があり、古い地名や建物などに軍都の面影を見ることが出来る。伏見区を中心通りは「師団街道」、これと交差する通りは「第一軍道」「第二軍道」などとよばれている。伏見区は龍谷大学、京都教育大学、聖母女学院などがある文教地区でもあるが、その敷地の多くはかつての軍用地である。聖母女学院のレンガ造りの本館は、京都第16師団の建物を譲り受けて校舎として利用していたものだそう。今は史料館として公開されており、建物の歴史を説明した説明のパンフレットもあった。おそらく聖母女学院の生徒は、わが街・わが母校の歴史に触れながら、戦争について実感をもって学ぶのだろう。貴重な史料を保存し、公開し、学びにつなげていくことの大切さを改めて感じた。

アジア太平洋戦争の終結から68年が過ぎた。近現代史の学習において、戦争体験の聞き取りは年々難しくなっている。今、戦争体験を語ることができる人はど

れくらいいるのだろうか。女子部の中学3年生は長崎研修旅行の平和学習として、被爆者の体験をお聞きしている。語り部の下平作江さんは10歳の時に被爆した方だ。聞く側の中学3年生の祖父母より少し上の世代だろう。社会科では、中学2年生に夏休みの宿題として「戦争体験の聞き取り」を課してきた。かつては、生徒が聞いてきた祖父母の戦争体験を、3学期の戦争の授業で紹介したことがあったが、数年前からは聞き取り自体が難しくなっている。そんな時代だからこそ、近現代史のさまざまな史料を戦争学習にもっと活用できるとよいのではないだろうか。

数年前、私は自分より若い人から戦争の話を知るといって今までにない経験をした。高校2年生の沖縄研修旅行に付き添った時のことである。沖縄にはガマとよばれる鍾乳洞がたくさんあり、戦争中はそこに住民が逃げ隠れた。私のクラスでガマの説明してくれたのは、戦争未体験の学生さんだった。今どきのおしゃれな女の子が語る沖縄戦の悲惨さに私たちは息を呑んだ。沖縄戦の真実を語る膨大な史料が、戦争を知らない大学生の言葉によって、高校生の心に深く刻まれたのである。

今年8月4日、朝日新聞が一面で報じた「幻のカルテ発見」という記事に私は目を奪われた。1945年8月6日、広島で被爆し、世界で初めて「原子爆弾症」と診断された女優・仲みどりさんのカルテが見つかったのだ。この史料の発見により、被爆時のようすや放射能被害の生々しい実情がわかった。戦後68年たってもまだわからないことはたくさんあり、これから明らかになっていくこともあるだろう。

「史資料の保存と利用は相反するのだろうか？」が学園史料委員会から与えられた問いである。中学校の社会科の教師としては、学園の史料を授業等に活用できることはたいへんありがたい。史料を利用できるように整理し、保存するという、史料編纂に関わる方々の日々の努力には心から敬意を表す。史料の保存・整理はたいへん根気のいる地道な作業である。その努力で見出された貴重な史料があるからこそ、私たちは歴史を知ることができるのである。

学生時代、私は現代史ゼミに所属した。私が師事した教授は、当時東京裁判の新史料を次々に発見し、新

しい戦後史像を鮮やかに描き出していた。師の口癖は「史料、史料、新史料」「とにかく少しでも新しい史料にあたれ、歴史は文学ではない」。師はこの言葉通り、史料探しに労を惜しむことがなかった。敗戦前後の貴重な史料の中には、処分されてしまったものが多い。日米で外交文書の公開の制約について差があるため、日本側の史料を求めてはるばる米国国立公文書館を訪ねるといったこともあったようだ。ゼミでは劣等生だった私だが、史料に基づいて歴史を描くという姿勢だけは心に刻んだつもりである。

歴史を描くのは史料である。史料を利用しやすく整理・保存してくれる方々の努力を忘れてはならない。学園の史料を、その学園で学ぶ人々が利用できるのはすばらしいことである。そのことに心から感謝したい。ぜひ私も、それらの史料を使ってよい授業ができるよう努力したいと思う。

(南山高等・中学校女子部教諭)



旧制南山中学校校舎

ヒルシュマイヤー著作集編纂事業と学園史料

岡部 桂史

現在、社会倫理研究所と大学史料室が協力して、南山大学第三代学長ヨハネス・ヒルシュマイヤー先生の著作集の刊行を進めている。著作集の刊行準備は、没後30年の節目である2013年刊行をめざして、2011年春にスタートした。編纂事業には、経済学部元教授の川崎勝を中心に、社会倫理研究所や人文学部、経済学部、経営学部、ビジネス研究科の教員が集まり、学部・部局を横断して、それぞれの専門分野を生かしながら、ヒルシュマイヤー先生の多彩な研究や教育・社会活動を跡づけようと奮闘中である。

南山大学において、ヒルシュマイヤー先生は、神言修道会神父としてパッヘ初代学長とともに大学の草創期を支え、経済学部や経営学部、社会倫理研究所の礎を築き、後には学長（在任期間：1972-83年）として大学運営に多大な貢献をした人物として知られている。現在でも、L棟（ヒルシュマイヤー記念館）やヒルシュマイヤー国際交流奨励金で名前を目にすることも多い。しかし他方で、ヒルシュマイヤー先生の学術的な業績・貢献については、学園関係者の多くがご存じないのではないだろうか。ヒルシュマイヤー先生は、経済史・経営史の学界では、死去からかなりの時間が経っているものの、現在でも著名な研究者である。私は



ヨハネス・ヒルシュマイヤー第三代南山大学長(1972年頃)

2012年春から経営学部の「経営史」を担当しているが、今も周囲の大学関係者から「あのヒルシュマイヤー先生の・・・」と何度も質問を受けるほどである。

ハーバード大学の博士論文を邦訳した『日本における企業家精神の生成』（1965年）や由井常彦氏との共著『日本の経済発展』（1977年）は、経営史や企業家史の古典的な名著となっている。『日本の経営発展』は、経済・経営分野での権威ある学術賞「日経・経済図書文化賞」も受賞しており、当時から学術的に高く評価されていた。今回の著作集では、上記2冊以外の論文や対談、講演をまとめている。私が担当する「経済・経営編」は、2014年春に刊行予定であるが、すべての論考が大変面白く、示唆に富んでいる。また、今回の編纂事業では、南山大学史料室が所蔵しているヒルシュマイヤー関係の文書、書簡、写真を基礎史料とさせてもらった。第三代学長であり、神言修道会神父という事情もあるとはいえ、史料室所蔵史料がなければ、編纂事業は実現しなかったであろう。

現在、南山大学に限らず、大学における研究や教育を社会に発信することが重要な課題となっている。教育については、学生を社会に送り出すことで、組織として一定の成果を挙げていると思われるが、研究については、論文や研究発表などが中心であり、今なお個人の役割が極めて大きい。多数の研究者を擁する南山大学、広くは南山学園が、研究資産を蓄積し、また蓄積するだけでなく、有効に公開・発信するためには、継続的かつ組織的な取り組みが欠かせないであろう。ヒルシュマイヤー著作集は、大学史料室をはじめ、南山大学の人的資源や組織がフル活用されている。今後の南山大学における社会発信の一つのモデルとなることを期待したい。

（南山大学経営学部准教授）

《記念誌・史料集などの紹介 3》

1. 南山学園創立 75 周年記念誌編纂委員会編『南山学園史料集 4 南山大学インターナショナル・ディヴィジョン史料集 下』2009 年 3 月 13 日、南山学園
南山大学インターナショナル・ディヴィジョンが終焉を迎える 1959 年までの関連史料を収録した。
2. 南山大学史料室編『南山学園史料集 5 アルベルト・ボルトと南山学園』2010 年 3 月 19 日、南山学園
南山学園第七代理事長アルベルト・ボルトの教育思想・事業に関する史料を編集して収録した。
3. 南山大学史料室編『南山学園史料集 6 南山大学の人類学』2011 年 3 月 18 日、南山学園
南山大学における人類学の教育・研究の組織・制度に関わる史料を、1970 年代末を目途に編集し収録した。
4. 南山大学史料室編『南山学園史料集 7 イルサ・フォン ライスナー作品集』2012 年 2 月 20 日、南山学園
南山学園および関連機関が所蔵するイルサ・フォン ライスナーの彫刻ならびに絵画作品を収録し、あわせて作品のかつての設置場所や関係者を紹介した。
5. 南山大学史料室編『南山学園史料集 8 南山学園のレーモンド建築（上）』2013 年 3 月 20 日、南山学園
南山学園および関連機関のレーモンド建築に関する写真資料を収録するもので、上下 2 分冊とし、本冊には南山高等学校・中学校 男子部、南山高等学校・中学校 女子部、南山短期大学、神言神学院のレーモンド建築に関する写真資料を掲載した。
6. 南山大学史料室運営委員会編『アルケイアー記録・情報・歴史一』第 3 号、2009 年 3 月、南山大学史料室
南山大学史料室の紀要。2008 年度 南山学会シンポジウム記録「モノ・記録・記憶の文化資源化ー南山学園における実践のためにー」他を収録した。
7. 南山大学史料室運営委員会編『アルケイアー記録・情報・歴史一』第 4 号、2010 年 3 月、南山大学史料室
南山大学史料室の紀要。史料 高橋敏郎「レーモンドの大学会館を撮影して」他を収録した。
8. 南山大学史料室運営委員会編『アルケイアー記録・情報・歴史一』第 5 号、2011 年 3 月、南山大学史料室
南山大学史料室の紀要。講演録 菅真城「大学アーカイブズ「新時代」」他を収録した。
9. 南山大学史料室運営委員会編『アルケイアー記録・情報・歴史一』第 6 号、2012 年 3 月、南山大学史料室
南山大学史料室の紀要。講演録 白川哲郎「大学資料と自校教育ー大阪樟蔭女子大学の場合ー」他を収録した。
10. 南山大学史料室運営委員会編『アルケイアー記録・情報・歴史一』第 7 号、2013 年 3 月、南山大学史料室
南山大学史料室の紀要。講演録 福田千鶴「古文書大国日本とアーカイブズ」他を収録した。

史資料解説

“PILOT PLAN OF NEWBLDGS. TO NANZAN UNIVERSITY” (レーモンド設計事務所所蔵) について

永井 英治

これは実現しなかった計画の図面で、レーモンド設計事務所には、南山大学について、このような図面が複数所蔵されている。この図面は、現在の南山大学名古屋キャンパスグリーンエリアに、JUNIOR COLLEGE (東)、INTERNATIONAL CENTER (中央)、ANTHROPOLOGY ASSOCIATION (北西)、OUTSIDE THEATER (南西) を配置するもので、年次の記載はない。しかし、図面作成者としてサインのある OHNISHI (大西英輔) 氏がレーモンド設計事務所に在職して南山大学の設計に関わった時期から判断して、1968~69年の作成のものと考えられる。

1968年4月に開学した南山短期大学は、隼人町の南山高等学校・中学校(女子部)校舎の一部を利用して始まり、翌1969年から独自の校舎建設の準備が始まった。校舎建設候補地には複数の案があり、そのひとつに基づいて作成されたと見られるのが、この図面である(図面の作成時期もほぼ合致する)。

注目されるのは、南山短期大学の校舎が南山大学に設置されるよう計画されていることである。もともと、

南山短期大学の設置場所については、南山大学キャンパス内に設置する意見もあったが、学生運動の影響などを懸念する声により、設置認可申請までに隼人町に変更されていった経緯がある(アルベルト・ボルト「南山短期大学設置の経緯」『南山学園史料集5 アルベルト・ボルトと南山学園』、史料56、2010年、南山学園)。しかし、この図面は、その計画が完全に消えていたのではなく、南山大学キャンパス内への設置も可能性が残っていたことを示すものである。

また、ANTHROPOLOGY ASSOCIATION なる表記は、人類学研究所と附属陳列室の再統合の可能性が模索されていたことを示すものであろうか。野外劇場の設置などは大学キャンパスの利用法としてはかなり大胆なもののように思われる。そのように考えたとき、この図面が作成された段階では、南山短期大学を南山大学キャンパス内に設置することの可能性は、それほど期待されてはいなかったのかもしれない。

(南山学園史料委員会副委員長)

史資料寄贈のお願い

南山学園史料室では、南山学園に関する以下のような史資料を広く収集しています。

- モノ：校章・バッジ・体操服・制服など。
- 文書：教科書・教材・時間割など。
- 写真：授業・学生生活・サークル活動など。

在学・在職時にはありふれていたものが、学園史を知るための貴重な史資料となることは少なくありません。まずは南山学園史料室(TEL052-861-0613/FAX-052-861-0614)までお知らせ下さい。

南山アーカイブズニュース 第6号

Nanzan Archives News

発行日 2013年11月1日

編集 南山大学史料室

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18

発行 南山学園史料委員会

〒466-0838 名古屋市昭和区五軒家町6

印刷 株式会社クイックス

〒456-0004 名古屋市熱田区桜田町19-20